

新型コロナは感染対策から「医療崩壊対策」の段階に

2021年1月16日 太田隆次

テレビではこれまでは、政府や専門学者や公私立の大病院などのコロナ対策の報道が多かったのが、患者の増加に医療施設がついていけず、「医療崩壊」が現実のものとなりました。もはや新型コロナ対策とは ①「感染対策」の段階はとっくに通り過ぎ、②「医療崩壊対策」に移りました。

では「医療が崩壊」するとどうなるのか。本日のNHKでイタリアの例が特集されていましたので見たままを要約します。

コロナ医療施設が満杯になったイタリア北部のベルガモ市（人口12万人）の悲惨な実態が紹介されていました。

要するに救急車で運んで来ても病床が満杯で、入院先や治療の選択ではなく「年齢による選択」つまり、算術的に若い患者から順に入院させる、ある年齢から上は線引きして入院お断りで自宅に戻す、極端な例を挙げればただ若いというだけで入院加療させ、高齢者というだけで入院拒否で見殺し同然の悲劇が繰り返されていたそうです。

しかし、我が日本も人ごとではありません。最近の報道によると、日本でも二度目の緊急事態宣言後、第三波と共に医療崩壊が始まっていると懸念されています。

国民皆保険制度で医療大国の筈の日本ですが、感染者用病床は世界では少ないレベルなのです。そこでこのほど厚生労働省が特別チームを作り、民間の地域病院の空き病室を感染者用への改造に乗出しました。昨年は打診程度で病院側の「入院患者で満室です」で済んだようですが、今年は感染病用の病床数を一つでも増やさねばならない厚生労働省の要請がそろそろ始まるようです。